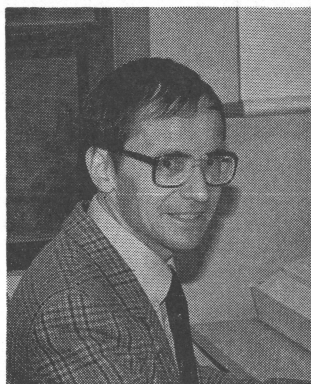


素顔 '87

(2)



### 成層圏の守護神 J. Holton

今回は、前回と同じく、Washington 大学の重鎮で、教科書で、日本でも良く知られている J. Holton に聞いてみました。

問：まず学生時代のことを聞きたいのですが？

—ハーバード大学の物理学科を卒業して、MIT の気象学に移りました。

問：何故、気象学を選んだのですか？

—とに角、古典物理学をやりたかった。学生時代に、Goody が授業に来て、その時の学生の数は2人で、もう1人が、Stone (現在、MIT の chairman) であっ

たが、この授業を聞いて、気象学に決めた。最初は、radar meteorology をやろうとしていたが、Charney に出会って、それから、GFD を始めた。最初は、Laboratory model の様なものを作ろうとしていた。その後、一年、ストックホルムで post-doctoral をやり、そのあと Washington にやって来た。

問：成層圏を始めた理由は？

—J.M. Wallace が一年前にシアトルに来ていて、成層圏を始めていたので、その影響で始めた。

問：自分の仕事の中で、最も誇りに思うものは？

—Lindzen と一緒にやった、QBO の理論の仕事である。

問：今、自分が興味を持っている気象学の問題は何ですか？

—やはり、成層圏の微量成分の輸送の問題である。

問：日本の気象学に対してどのような印象を持っていますか？

—大学の研究 level は高いと思うけれど、日本政府は、“rich country” がそうあらねばならない様に、科学を support していないと思う。

問：今後気象学の分野で何をなすべきだと思いますか？

—学際的な仕事をもっとしてゆく必要がある。数値予報などにとらわれず、幅広く、物事を進めてゆく必要があると思う。

Holton は、現在進行中の、Stratosphere Troposphere Exchange Programme の責任者であり、あくまでも、成層圏に留まる気と見受けられた。“成層圏の人”として、Holton の今後の活躍に期待したい。

(住 明正)



### ヴァイサラ賞の設置決まる

昨年、フィンランドのヴァイサラ社から寄せられた寄付を基金として、ヴァイサラ賞を設けることが、WMO 第38回執行理事会で承認された。これは、前年間に測

器・観測について、最も優れた論文の著者に与えられるものである。

(気象庁ニュースより)